

育館改築工事中に、グランドおよびバレーコートの照明設備の改良工事および囲壁改築工事も実施された。

1988（昭和63）年1月5日に1年生のラグビー観戦、11日に1・2年生の県下一斉実力考查、23・24日に共通一次試験が行なわれた。そして1月31日に校内マラソン大会、2月13～17日に2年生の野外活動が実施された。前年度は雪不足に泣かされたが、この年は十分な積雪と好天に恵まれ、スキー実習は順調にすすんだ。なお前年に行なわれた明治村見学は、日程があわただしくなることもあって、この年は実施されなかった。

2月25日に芦高第40回卒業証書授与式が行なわれ、第43期生男子216名、女子202名、計418名が卒業した。そして3月16日に高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に470名の合格者が発表された。23日の終業式の後、教職員の異動の内示があった。この異動の内容をめぐり、強制配転として職員が学校長に抗議し、年度末まで粉糾が続いた。

3 創立五十周年を迎えて（1988～90年）

本館および体育館の改築によって、本校の施設・設備は一新され、かつての芦高が置かれていた劣悪な教育環境はかなり改善された。しかし、狭い校地や騒音問題は依然として解決されなかつた。冷房が入る直前の初夏のころには、北側の窓はもちろん南側の窓も開けざるをえず、騒音によって教師の声はかき消されがちで、授業は多大の支障をこうむっている。そして外觀が整ったものの、芦高は新たな問題に直面するようになっていた。その一つは進路指導、とくに進学に関する問題であった。このところ、本校の進学成績の不振が各方面から指摘されていた。「学校経営の重点」には、進路指導や教科指導の徹底が以前から取り上げられてきたが、とくに1988（昭和63）年度からは、その第一に「進路指導の充実」が掲げられ、本校は進路指導に相当力を入れることにした。また芦高生も大きく変わってきた。社会的問題ともなっているいわゆる「登校拒否」生徒の増加は、本校でも例外ではなく、毎年若干の

生徒が出席日数の不足から原級留置となつたり、退学したりするようになった。教師たちは、これらの生徒に対する指導に多大の努力を傾けてはいるが、有効な解決策はなかなか見出しえていない。

日本が国際社会の一員として大きな位置を占め、それ相当の役割を果たすことが求められている現在にあって、教育もまた大きく変わりつつある。兵庫県は語学教育の充実を目的に、1977（昭和52）年度から米国人英語指導主事助手招致事業を開始し、1979（昭和54）年度からは英国人英語指導教員助手招致事業をはじめた。さらに1982（昭和57）年度改訂の「高等学校学習指導要領」で、実用的な外国語教育が重視されるようになったことを受け、英語コースや中国語・ハングル講座が設置されるようになった。指導助手制度は、1987（昭和62）年度から外国人英語指導助手招致事業へと発展した。本校では1979（昭和54）年9月から指導助手が訪れるようになったが、そのころは必ずしも毎週定期的にというわけではなかった。そして1986（昭和61）年9月からは、訪問指導校として継続的に指導助手が本校を訪れるようになった。

また「学制」公布によって近代学校制度の導入をはかった明治の「第1の教育改革」、「六三制」導入などの戦後の「第2の教育改革」について、現代の教育の荒廃を是正し、21世紀に向けた教育のあり方を示そうとする「第3の教育改革」が現在すすめられつつある。

中曾根内閣は1984（昭和59）年8月21日に、「教育改革に対する国民的要請にこたえ、長期的展望に立ち、政府全体の責任で教育改革に取り組む」ことを目的に、これまでの文相の諮問機関である中央教育審議会にかわり、首相直属の諮問機関として臨時教育審議会（臨教審）を発足させた。臨教審は設置期間が3カ年とされ、1985（昭和60）年6月26日に「教育改革に関する第1次答申」を政府に提出した。この中で「教育基本法」の精神にのっとった上で、「個性の重視」を教育改革の基本精神とすることが提唱された。そして学歴社会の弊害是正や共通一次試験にかわる「新テスト」の創設、高等専修学校卒業者への大学入学資格付与、6年制中等学校の新設、

単位制高校の新設などが「答申」に盛り込まれた。1986（昭和61）年4月23日に「第2次答申」が提出され、「教育基本法」尊重の立場を明確にするとともに、21世紀に向けた教育目標として、ひろい心、すこやかな身体、ゆたかな創造力、自由・自律と公共の精神、世界の中の日本人が掲げられた。また具体的には、新採用教員に対する初任者研修制度の実施や大学審議会の設置が提言された。さらに1987（昭和62）年4月1日に「第3次答申」が提出され、教科書検定制度の改革や生涯学習体系への移行、資格試験における学歴要件の撤廃と人物評価の多様化、会話能力を重視した英語教育と外国人子女や帰国子女のための新国際学校の創設、教員への任期制導入、学術研究や大学院の充実などを内容とした。そして1987（昭和62）年8月7日に、「個性重視の原則」「生涯学習体系への移行」「変化への対応」の3点を強調し、また「日の丸・君が代」について、「学校教育上適正な取り扱いがなされるべきである」とした「最終答申」が提出され、臨教審は3年間にわたる審議を終えた。

臨教審に対しては、教育の政治的中立性を侵すものであるとの批判が出された。また「教育の自由化」や「9月入学」などが、はなばなしく論議されたが、審議を重ねるにつれ、現状追認の傾向が強まつたとも批判された。そして「臨教審答申」を受け、政府は1987（昭和62）年10月6日の閣議で、「教育改革推進大綱」を決定した。文部省は1988（昭和63）年3月8日に、教科用図書検定調査審議会に教科書検定規則と基準の改定案を示して了承され、さらに7月1日の機構改革で生涯学習局を発足させた。また私立大学も参加する新テスト（大学入試センター試験）実施のための、「国立学校設置法」の一部を改正する法律が5月25日に公布された。ついで新採用教員に1年間の初任者研修を義務づける「教育公務員特例法」の一部を改正する法律や、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部改正する法律が5月31日に公布された。そして教員免許状を専修・1種・2種に区分する「教育職員免許法」の一部を改正する法律が12月28日に公布された。

小・中・高校の「新学習指導要領」も、教育課程

審議会の答申をへて「臨教審答申」を一部取り込み、1989（平成元）年3月15日に告示された。学習指導要領の第6次改訂である。「新学習指導要領」の主な特色は、国際協調と相互理解のために我が国と外国の国旗・国歌を尊重する態度を育てる目的に、入学式や卒業式などに「国旗掲揚、国歌斎唱」を義務づけたこと、「心の教育」の拡充、高校での男子の家庭科必修など男女差の解消、社会科の再編成、教育の多様化・弾力化などである。とくに社会科は、小学校1・2年生における「生活科」の新設と、高校における「地理・歴史科」と「公民科」への分割および世界史の必修など、大きな変革を迫られることになった。この「新学習指導要領」は、高校では1994（平成6）年度から実施されることになっている。本校では1989（平成元）年度入学生のカリキュラムにおいて、2年次の英語の授業時間数の増加と、世界史必修を念頭に置いた手直しが行なわれた。

1988（昭和63）年4月1日に、櫻井校長が県立鈴蘭台高等学校長に転出し、かわって県立相生産業高等学校長吉田弘氏が本校第14代校長に補せられた。12日は本校創立記念日、21日は生徒大会、28日は春季遠足で1年生はゴロゴロ岳、2年生は修法ヶ原、3年生は甲山に出かけた。5月7日には第29回対県西定期戦が実施され、この年も芦高が10-5で勝利をおさめて7連勝を飾った。そして6月2日に自治会役員選挙立会演説会、翌3日に投票が行なわれて第41代執行委員会が成立した。

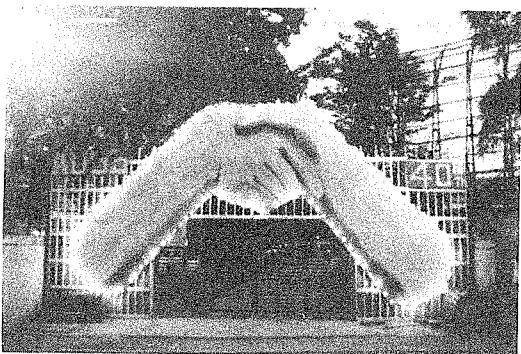
6月4日に第32回県高校総合体育大会がはじまり、軟式庭球部が男子ダブルスでベスト8ととなり、7月の近畿大会および8月の全国高校総体に出場した。この年の全国高校総体は、7月31日から8月20日まで兵庫県を中心に近畿2府4県で開催され、県内の14市4町で26競技種目中の19種目が実施され、本校からは軟式庭球部とヨット同好会が出場した。7月の関西高等学校ヨット選手権大会に出場したヨット同好会は、芦屋市を会場とした全国高校総体のヨット競技において、初出場ながら男子スナイプ級で11位となった。またアマチュア無線研究部がヨット競技補助員として連絡の任にあたり、さらに

プラスバンド・コーラス・写真部および野球・ラグビー・サッカー部が大会運営に協力した。そして10月の京都国体には、ラグビー部およびサッカー部の3年生それぞれ1名が、県選抜チームのメンバーとして出場した。また弓道部女子が11月の近畿大会、水泳部が男子100mバタフライで7月の近畿大会に出場した。なお兵庫県で高校総体が開かれたのを記念して、県下の各高校で記念植樹が行なわれることになり、本校ではタイサンボク（泰山木）が中館と南館の間に植えられた。

文化部では演劇部が、8月4～6日に熊本で開かれた第12回全国高等学校総合文化祭に出場した。総合文化祭の演劇部門は、第34回全国高等学校演劇コンクールを兼ねるもので、本校は前年度の近畿高校演劇コンクールで最優秀賞に選ばれたため、この年の出場となった。しかし、コンクール出場には多額の経費が見込まれ、とても自治会の特別会計でまかない切れるものではなかった。そこで本校の部活動後援会は、広く保護者・同窓生・一般市民に募金を呼びかけることにし、5月20日付で趣意書を配布した。こうして出場したコンクールでは、「わっと・あ・わんだふる・わーるど！？」を上演して芦高は非常な好評を博し、2位にあたる優秀校に選ばれて文化庁長官賞を与えられた。もっともコンクール中には、演劇部は食中毒騒動に巻き込まれ、全国紙でも報道されたが、幸いなことに大事にいたらず、全員無事に帰ってきた。さらに、演劇部はこの年12月の県高校演劇コンクールでも優秀賞に選ばれた。吹奏楽部は県吹奏楽コンクールでA部門の銀賞に選ばれ、邦楽部は近畿大会で優秀校に選ばれた。またアマチュア無線研究部3年生の宮原純司君と山本有尚君が、旺文社主催の第6回全国高校パソコン＝コンテストのゲーム部門でグランプリを獲得した。両君はさらに兵庫県教委から「ゆずりは賞」を与えられた。

1961（昭和36）年に竣工した中館は、このところ老朽化が相当目立つようになっていた。とくに窓枠が危険になったため、1982（昭和57）年から翌年にかけては、その改修工事が実施されていた。また水道などの配管がかなり劣化し、生徒たちは赤さびま

じりの水に悩まされていた。さらに、便所もうす暗く汚れ、使用不可能な箇所もあった。本校はかなり前からこれらの改修工事を県に要望していたが、ようやく予算が認められた。そこで夏休みに入る直前の7月17日から、中館便所の改修工事および配水管工事が米澤工務店の施工ではじまった。工費は2550万円で、9月14日に工事は完成し、これによって中館の便所は見違えるように明るくなった。ついで屋上の防水工事が林建設工業の施工で行なわれた。しかし、中館屋上から時々、滝のように水が流れ出すという問題は、まだ未解決のままとなっている。これは配水管が途中で詰まっているためである。



第40回記念祭

9月28日から第40回記念祭がはじまった。この年のテーマは“絆—芦高生にないものを求めて—”であった。自治会執行部は、記念祭のパンフレットで「『絆』は絆を深めようと、これだけをがんばっても深まるわけではありません。何か一つの目標に向かってみんなでがんばれば、おのずから絆は深まるものです」と述べている。なお、次年度から記念祭は6月に実施されることになるため、この年が秋に実施される最後の記念祭となった。第40回記念祭の日程は次の通りである。

- 28日(水) 開幕式・体育祭
 - 29日(木) 自治会展示（クラス展示）
映画鑑賞会（大教室）
 - 30日(金) 文化部公演（ルナホール）
 - 1日(土) 記念講演会（体育館）・文化部展示
 - 2日(日) 文化部展示・閉幕祭
- 従来から、体育祭のデコレーションについては品評会が行なわれてきたが、この年からユニフォーム

についても写真による品評会が行なわれることになった。また自治会展示は、1・2年生がテーマにそった課題展示、3年生は自由参加の展示となった。そして芦高記念祭はじまって以来の、3学年全クラスの参加による展示となった。映画鑑賞会では「七人の侍」が上映された。そして記念講演会では、障害児教育と差別問題に取り組む止揚学園リーダーの福井達雨氏が、「心のひびきのつたわりを」と題する講演を行なった。講演会終了後、体育館の生徒集会室では、止揚学園の経営の一助となることを目的に、福井氏の著書の販売も行なわれた。なお10月2日に図書館において、五十周年記念特別委員会が卒業アルバムなどを中心とする展示を行なった。

ところで第41代自治会長山本光一君は、記念祭について次のように述べている。「伝統におんぶされ、受け身の記念祭が続いた。日数のわりに中身が伴っておらず、学力低下の直接原因とまで言われ、今、記念祭の存在そのものが問われ、皆さんのが見えないところで危機に陥っている。ここ数年の記念祭を見てみると、確かに大きな進歩は何一つなかったと思われる。見た目には小さな進歩でさえも、あったと断言するには不安である。しかし、結果に残らなければ何にもならないと言う人がいるかもしれないが、その過程を大事にしたい。ただむやみに時間が費やされたのでしょうか。そうでないと思います。努力の跡は確実に積み重ねられて現在に至りました。これからもそうです。良くなかったとは言えない記念祭ですが、誰がこの記念祭を悪くなつたと言えるだろうか」(「芦笛」第42号)

「臨教審答申」を受けて設置された大学入試改革協議会は、1988(昭和63)年2月15日に最終報告である「大学入試改革について」を発表し、1990(平成2)年度入試から新テストを実施することとした。新テストの実施は、当初の予定より1年延期された。そして7月29日に文部省は、新テストの正式名称を大学入試センター試験とすることを発表した。こうして新テスト(大学入試センター試験)実施が不可避となる中で、本校では記念祭の実施時期をめぐって、校務運営委員会を中心に、4月以来論議が続けられていた。当初、新テストは12月下旬の実施が予

定されていたため、進路指導の立場からすると、従来通りの記念祭の日程では、3年生の受験準備が間に合わないことが予想された。もっとも、国大協にかわって大学入試センター試験の運営母体となる大学入試センター試験協議会は、高校側の反発を考慮して1988(昭和63)年10月5日に、新テストの実施時期を1月中旬に繰り下げる決定した。

記念祭の実施時期やあり方の検討の必要性について、5月11日の職員会議で進路指導課より要望があった。そして記念祭終了後の11月16日の職員会議で、記念祭を中心とした学校行事について、校務運営委員会で検討中であるとの報告がなされた。12月8日の職員会議では、1989(平成元)年度の記念祭は9月実施で、日程を4日間に短縮する提案が了承された。しかし、1989(平成元)年1月17日の職員会議では、記念祭を9月下旬に4日間実施するという具体案は、職員の過半数の支持が得られず否決された。そして2月8日の臨時職員会議で、6月21日から25日まで5日間の日程で記念祭を実施するという提案が、生徒課から行なわれ、ようやく記念祭の時期変更が承認された。

記念祭の時期変更の最大の理由は、生徒の学力低下、とくに進学成績の低迷を開拓し、生徒の進路希望が実現できる体制作りにあった。また大学入試センター試験の実施など、大学受験の実態に対応することが大きな背景となっていた。もとより、記念祭のもつ教育的意義については、職員も大きな考慮をはらった。記念祭は、芦高生の自治活動にとって最大の行事であり、自治会執行部の力量をはかる基準でもあった。そして体育祭と文化祭および開幕式・閉幕祭からなる一大行事としての記念祭が、芦高の独自の校風を育てる上で大きな役割を果たしてきた。芦高での学園生活は、記念祭を中心に回っているといつても過言ではなかった。かつて自治会執行部は、記念祭の春・秋分離案や春実施案など、その実施時期をめぐってさまざまな改革を企てたこともあった。そして10月上旬が9月下旬の実施へとやや時期が繰り上がったこと、7日間の日程が5日間に短縮されたことなど、いくつかの点で改善が加えられてきた。記念祭6月実施の決定は、文化部員の活

動期間や、1年生と3年生の記念祭へのかかわり方など、自治会活動にとってかつてない変革となることが予想された。ただ、記念祭の時期変更がもっぱら職員間の論議に終始したことは、芦高生の自治活動の尊重という観点からすると問題であった。しかし、学校行事の時期設定などは、教育の範囲内とも考えられた。2月23日および3月6日に生徒課と自治会執行部の合同会議が開かれ、教師側の方針に対する執行部の納得が得られ、7日には代議員会および文化部・書記外局・運動部幹事会が開かれ、記念祭の6月実施は決定した。そして3月15日のロングホームルームの時間に、放送によって生徒への事情説明が行なわれた。さらに23日の終業式で、校長より記念祭の時期変更についての説明がなされた。

記念祭後の10月初めから、朝の登校時間を除いて閉ざされたままであった正門が、日中も開かれることがになった。正門の開放は、「開かれた芦高を目指す」との趣旨によるものであった。なお正門付近の駐車も自粛することになり、あわせて生徒の正門利用や外出などの指導が行なわれた。また2学期後半には、周辺住民からの苦情もあって、芦高生の放置自転車に対する学校側の指導が強化された。また運動部幹事会および文化部幹事会では、違反したクラブに対しては、校舎内外の清掃や部活動停止の処置をとることにした。そして校内美化の観点から、自治会を中心に10日間のクリーン＝キャンペーンを実施することも決められた。

この年から1年生の野外活動は、夏休み中にかわって2学期中旬に実施されることになり、10月12日に1年生が、2泊3日の大山における野外活動に出発した。野外活動の時期が秋となったため、かなり寒くなることが予想され、これまでのテント泊は取り止めとなつた。12日は皆子山キャンプ場で飯ごう炊さんが行なわれたが、小雨模様となり、翌13日には大山は初雪におおわれてしまった。生徒たちは大山登山の中止に喜んだものの、一方で拍子抜けした思いであった。大山登山のかわりに、この日はバスで足立美術館および松江城見学が行なわれ、夜にキャンプファイアが実施された。厳しい冷え込みの中で、登山中止の憂さを晴らすかのように、生徒

たちの気分は大いに盛り上がった。そして最終日の14日には、生徒たちは各クラスごとに蒜山高原の秋を楽しみ、午後1時に帰路についた。なお11月2日にはクラス別の秋季遠足が実施された。

1989（昭和64）年1月5日には、恒例の1年生男子のラグビー見学が行なわれた。そして1月7日には昭和天皇逝去によって昭和が終り、新たに平成がはじまった。9日に3学期の始業式が行なわれ、この3学期から、教職員の週休2日制に向けての試みが実施されることになった。これは夏休みなどの指定休のまとめどりと、年休を組み合わせたものであった。

11年目を迎えた共通一次試験は21・22日に実施された。翌年からは大学入試センター試験がはじまるため、これが最後の共通一次試験であった。毎年問題となっていた社会・理科の科目間格差がこの年は著しく、とくに理科では、平均点が化学は73.8、地学は71.3であったのに対し、物理は48.8、生物は47.2であった。そこで大学入試センターは異例の得点修正を行なった。しかし、この修正によって、物理・生物選択者は例え0点でも、一挙に50点近くに達することになり、いっそう不公平感が増す結果となった。また1987（昭和62）年度入試から導入された国公立大学の複数受験制に、1988（昭和63）年度入試から、従来のA・B方式とともに西日本の大学を中心に分離分割方式が加わった。そして1989（平成元）年度入試では、分離分割方式がいっそう広まり、複数受験は名ばかりのものとなってきた。

1月28日に校内マラソン大会が行なわれ、2月13～17日に2年生のスキー合宿が実施された。この年から2年続いた鷲ヶ岳スキー場にかわり、長野県木曾郡王滝村御嶽高原スキー場に行先が変更された。これまで利用した鷲ヶ岳の宿舎が、一般客相手に営業の中心を移したことが、変更の理由であった。御嶽スキー場がある王滝村は、1984（昭和59）年9月14日の長野県西部地震で、山が崩れて大きな被害を受け、その後復興に取り組んでいるところであった。2年生は13日の午前8時に本校を出発し、午後4時30分に現地に到着した。14日の午前9時30分および午後1時30分から、それぞれ2時間のスキー実習が

行なわれ、15・16日も同様の実習が行なわれた。3カ所に分かれての分宿となつたが、積雪と好天に恵まれたスキー合宿であった。

2月25日に芦高第41回卒業証書授与式が行なわれ、第44期生男子216名、女子241名、計457名が卒業した。そして3月16日には高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に470名の合格者が発表された。なお、この1988（昭和63）年度は芦高にとってかつてない悲しい年であった。まず7月4日に英語科の上木敏正教諭が不慮の死を遂げられ、そして3月11日に長らく病気療養中であった保健体育科の竹島真知子教諭が逝去された。御2人ともはるかに寿命とは遠い年令で、将来がある身であった。これまで、芦高在職中の職員や在校生の死亡された例は多少あったが、この年ほど職員や生徒にとって、つらく悲しい思いをした年は少なかった。慎んで御冥福をお祈りしたい。

1989（平成元）年 4月8日に、第1学期始業式ならびに入学式が行なわれた。そして同日に着任式、10日に離任式が行なわれた。この数年、古くから芦高に勤務してきた教師の退職や転勤が相次ぎ、すっかり職員の顔ぶれが新しくなった。12日は芦屋中学校創立以来、49回目の創立記念日であった。創立50周年を翌年にひかえ、校内の五十周年記念特別委員会の活動は、いよいよ本格化した。17日には生徒大会が開かれ、1054万2838円の自治会予算が決定した。28日には春季遠足が実施され、例年通りに1年生はゴロゴロ岳・お多福山、2年生は布引の滝から森林植物園・修法ヶ原、3年生は甲山へ出かけた。そして第30回目を迎えた対県西定期戦が、5月8日に行なわれ、芦高は4-10で敗れて定期戦8連勝はならなかつた。

6月10日に第33回県高校総合体育大会がはじまり、弓道部女子が団体および個人で優勝し、8月の全国高校総体に出場した。また陸上競技部は女子走幅跳で近畿大会に出場し、水泳部は6月の県高校選手権で男子100m背泳ぎで1位となり、男子400mメドレーリレーおよび男子200m背泳ぎとともに7月の近畿大会に出場し、さらに2種目で全国高校総体に出場した。さらに水泳部は、男子100m背泳ぎで

9月に開かれた国民体育大会に出場した。またヨット同好会は、県高校総体でスナイプ級およびFJ級で男女ともに優勝し、第1回近畿高等学校ヨット選手権大会および国体に出場した。なおヨット同好会は、職員会議および運動部幹事会の承認をへて、3学期に部に昇格した。

文化部では、演劇部が11月の県高校演劇コンクールで最優秀賞を受け、ついで近畿高校演劇コンクールで優秀賞および演出賞・舞台美術賞を受けた。吹奏楽部は県コンクールのA部門で金賞、将棋部は県高校選手権大会で3位となった。また邦楽部は11月に埼玉で開かれた第4回国民文化祭および第9回近畿高校総合文化祭に出場した。そして写真部は阪神高校写真連盟後期コンテストで金賞に2点、銀賞に2点、銅賞に5点が選ばれた。

第41回記念祭は6月21日からはじまつた。かつて第20回記念祭が、自治会執行部の成立の遅れにより、10月の体育祭を中心とした行事と5月の文化祭とに分けて実施されたことはあったが、今回は記念祭の時期変更により、6月に実施される最初の記念祭であった。そして第41代執行部は、2度の記念祭を担当することにもなつた。記念祭のテーマは“革新～終焉そして誕生～”で、この時の記念祭が置かれていた状況を表わしていた。記念祭の日程は次の通りである。

21日(水) 開幕式・体育祭
22日(木) 記念講演会・パネル=ディスカッション・コーラス（体育館）

23日(金) 文化部公演（ルナホール）

24日(土) 自治会展示・文化部展示

25日(日) 自治会展示・文化部展示・閉幕祭

22日はCulture Festivalとして、まず記念講演会が催され、本校第1期生で、この3月に本校を退職したばかりの建武氏が、「未来を見つめ過去をひもどく」と題する講演を行なつた。その後、体育祭のユニフォーム=ファッショショーンショーが行なわれた。そしてパネル=ディスカッションでは、歴代自治会長であった高津孝作（第16期生）・小松恒温（第30期生）・安藤卓（第39期生）氏および第41代自治会長山本光一君をパネラーに、川村龍一氏（第17期生）

をコーディネーターとして、「それぞれの記念祭～新たなる旅立ちのために～」をテーマに、新しく生まれ変わる記念祭をめぐって話し合われた。さらに「校歌」を課題曲とするコーラスでは、1年生の音楽選択の3クラスが出演した。自治会展示では、1年生は「校内装飾」としてハリボテ人形・ふみ絵・コーラス・木の装飾・アーチ・たれ幕を内容とする展示を行なった。2年生の各クラスは、「海」「フランス革命二百周年記念展」「世界の音楽革命」「理想型お弁当」「芦高の昭和史」「クラブの革新」「ファンションの革新」「アンケート」「革新、なんでも写真」「野球界の革命」というテーマにそった展示を行ない、3年生は従来通りの自由展示であった。また2・3年生の美術・書道選択クラスによる芸術展示も行なわれた。

文化部は、記念祭が6月に実施されたため、公演や展示の準備に相当苦労し、年間の活動計画も大きく変わった。しかし、さまざまな問題点があったにしても、ともかく6月記念祭は、例年通りの質と量を維持しつつ、新たな記念祭の発展に道を開く大きな一歩を踏み出した。ただ、記念祭が1学期に実施されることになったため、1学期の行事が過密状態となり、高校総体の時期とも重なって、とくに体育科の負担が著しくなった。また文化部は、3年生が活動の中心となることが予想されていたが、實際には2年生が中心となる部が多く、文化部員としての活動期間が、逆に短縮されてしまった。

7月10日に自治会役員選挙の立会演説会、11日に投票が行なわれ、第42代自治会執行委員会が成立した。そして18・19日を中心に全学年の保護者会が開かれた。担任にとって学期末の忙しい時期ではあったが、日程の調整がどうしてもつかず、やむなくこの時期の実施となったのである。

9月14日早朝、阪神間は記録的な集中豪雨に見舞われた。道路はいたるところで川のようになり、水につかって動けなくなったり水没した車も見られた。芦高の通用門前は激流のように水が流れ、本館・中館・南館を結ぶ通路は水がひざまで達し、中館と南館の1階も水があふれた。そして中館地下の食堂と倉庫は、天井まで水につかって完全に水没し

た。芦高は臨時休校となり、登校してきた生徒は帰宅させられた。ようやく雨が止み、11時ごろには雲間に太陽が姿を見せるようになった。

この豪雨によって芦高が受けた被害は、予想以上に大きかった。かつて中館地下は、中館完成の直前の1961（昭和36）年6月26日、および1967（昭和42）年7月9日の2度にわたって浸水したことがあった。そして3度目にあたるこの時の浸水によって、倉庫に保管してあった重油が漏れ出し、食堂の什器・備品などがすっかり使用不可能な状態になってしまった。長年、芦高生や武庫高生が親しんできた中館地下の食堂は、こうして思いがけなく消え去った。また井戸水を利用していた中館および体育館の便所などが使用不可能となり、冷房設備も損害を受けた。暑さの残る中を、生徒たちは冷房なしの窓を締め切った教室で、授業を受けなければならなかつた。また地下の倉庫に保管されていた演劇部の道具が被害を受け、さらに廃部となつた文芸部の出版物なども、すっかりゴミ同然になってしまった。

1日に250人以上の本校生徒が利用していた食堂の再開は、急がねばならなかつた。体育館1階の生徒集会室は、もともと食堂となる予定で調理室なども準備されていたが、昼食時の道路横断による交通事故が心配されたため、生徒集会室として使用することになったものである。そこで生徒集会室を食堂として目的外使用することになり、横断歩道も設置されることになった。こうして11月6日から、新たに金澤給食株式会社によって食堂の営業が再開された。価格は以前とほぼ同じで、定食が350円、カツ丼・カレーライス・ラーメンなどは250円、きつねうどん・てんぶらうどんは200円であった。また生徒の昼食時間を配慮して、12月1日から昼のショートホームルームの開始時間を5分遅らせて13時10分からとし、第5时限の開始を13時25分からとする校時変更が行なわれることになった。

9月24日に1年生が、2泊3日の大山における野外活動に出発した。記念祭が1学期に実施されたため、1年生の野外活動が2学期最大の行事となっていた。野活2日目に大山登山が行なわれ、その日のキャンプファイアーの途中から雨に見舞われた。晴

天に恵まれたこの年の野活であったが、この時だけは雨中のトーチサービスとなった。この年の2学期は記念祭の時期変更によって学校行事が少なく、生徒たちは落ち着いて勉学に励むことができたと思われる。

9月30日に第2回育友会評議員会が開かれ、育友会の名称をPTAと改めることが承認された。全国高等学校PTA連合会が名称を統一することを決め、兵庫県でもその方針が具体化したため、本校における改称となったのである。正式には、1990（平成2）年6月9日のPTA総会でこの改称は決定した。本校におけるPTAは、まず1942（昭和17）年7月に興学会として発足し、1946（昭和21）年9月1日に父兄会と改称、さらに1948（昭和23）年6月27日に新たな理念のもとで育友会に移行し、今日にいたったのである。今後、よりいっそう、P（父母）とT（教師）の協力体制を密にして、生徒の教育に当たっていくことが望まれる。

ところで、この2学期には通学区域に関する問題が起きた。ことの発端は、9月下旬に芦屋学区の通学区域に関する県教委の説明会が、市内の学校関係者を集めて開かれたことからで、11月1日の職員会議で校長よりその間の事情説明があった。芦屋学区は県下の15学区の中で最小の学区であり、公立の全日制普通科高校は3校を数えるのみである。県教委の高等学校教育問題調査研究会は中間報告を発表し、芦屋学区について「学校選択の余地が少ない。従来からの交流のあった神戸第1学区との合併の是非について検討」するものとした。職員間には現在の学区を維持する意見や、他の学区との合併が避けられないならば、むしろ西宮・宝塚学区との合併の方が望ましいとする意見などがあった。学区の変更是芦高の将来を左右する大問題であった。しかし、県教委が芦屋学区について当分現状のままとすることにしたため、この問題はやがておさまった。

11月2日にクラス別の秋季遠足、9・10日には3年生の県下一斉模擬試験が行なわれた。年が明けた1990（平成2）年1月5日に、1年生男子恒例のラグビー見学が行なわれた。そして13・14日には、第1回目の大学入試センター試験が実施され、本校か

ら116名が受験した。大学入試センター試験は、出題方式や問題の難易度は共通試験と同じだが、「5教科受験」の原則を改めて「アラカルト方式」を採用したことや、国公立大学だけでなく私立大学も参加したことに大きな特色があった。20日にはこれも恒例の運動部対抗駅伝があり、27日の校内マラソン大会をはさんで、26～30日に3年生の卒業試験が実施された。

2年生のスキー合宿は、2月12日から16日まで4泊5日の日程で、長野県の御嶽スキー場で実施された。スキー合宿はこの年で7年目にあたり、御嶽は前年について2年目であった。木曽御嶽山を背景に、遠く西南方には駒ヶ岳などの中央アルプスを望む雄大な自然は、生徒たちに強い印象を与えた。しかし、スキー実習の初日以外は深い霧にたたられ、最終日には全員がゴンドラで山頂に登ったものの、残念ながら素晴らしい眺望は望めなかった。

2月27日に芦高第42回卒業証書授与式が行なわれ、第45期生男子243名、女子218名、計461名が卒業した。3月16日には高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に470名の合格者が発表された。そして3月31日に、吉田弘校長が願いにより校長を免ぜられた。

1990（平成2）年4月1日に、県立明石南高等学校校長八木勇蔵氏が本校第15代校長に補せられた。4月7日の職員会議で、八木新校長は「本校の伝統を継承するとともに、本校をどこにでもある高校にはたくない」との抱負を表明した。なおこの4月から、本校の校務分掌として教育課程委員会および国際理解教育委員会が発足した。そして9日に、第1学期始業式および入学式が行なわれた。いよいよ本校の創立50周年の年がはじまった。

本校が、芦屋中学校として1940（昭和15）年4月12日に最初の入学式を挙行して以来、50年の歳月がたっていた。この間、本校をめぐる情勢は大きく変化した。暗い戦争の谷間で草創の時期を過ごした本校は、戦後の希望に満ちた時代に、新生芦屋高校として輝かしい再出発を遂げた。日本が国際社会に復帰する中で、本校は栄光の時期を迎え、自治・自由・創造の素晴らしい校風が確立した。勉学にクラ

ブ活動に、まさに“理想の学園”がそこにあった。そして本校は幾多の試練に直面した。本校は、かつての旧制中学校以来の伝統を脈々と保ちつつも、新たな対応を迫られた。各地に多くの高校が生まれ、もはや芦高だけが特別の存在であることは許されなくなっていた。学力不振や登校拒否の生徒の増加など、現在の本校は、世間一般の高校が抱えていることと同じ問題に直面している。

しかし、第2代阪部由松校長の時代に確立された誇るべき校風は、今なお生き続けている。阪部校長はかつて「親愛なる生徒諸君！愛校心を燃やせ！そして特色ある学風を創造せよ」と呼びかけた（「芦高新聞」第18号）。また第11代馬場鉄夫校長は、「試練にたえて本校の伝統は残った、というよりはますます特異な校風は、みがきをかけたいと思いたい」と述べている（「芦高四十年史」）。時代とともに本校生が如何に変わろうとも、芦高は生徒の自治活動を尊重し、自由な校風の中で、創造の精神を培って行くことであろう。

[付記]

この「回想の五十年」と題する芦高的通史は、読者が本校同窓生および生徒であることを念頭に置いた年代記である。そして読者が、それぞれに思い出深い時代を本校で過ごしたことを配慮し、いささか煩雑なきらいはあるが、入学式・卒業式・学校行事などに関する事項は、できるだけ重複を恐れず記載することとした。また時代背景にも留意した。本校の50年の歩みが、社会の動きと決して無縁ではなかったからである。しかし、何分にも資料収集が不十分かつ断片的であるため、記述の軽重に対して不満の向きもあるかと思われる。また執筆者の認識不足や誤解も多々あることと思う。執筆者として、読者の叱責については謙虚に受け止めたいし、そうした問題点は、いずれの日にか正されることを期待したい。

なお執筆にあたっては、まず井上浩が草稿を書き、武岡徹・小西征生・藤原真知子とともに検討を重ねた。そして記念誌編集委員会として、必要に応じて、校長・教頭および校務運営委員会にはかった上で

最終稿とした。

(記念誌編集委員会)

[参考文献]

「学制百年史」

文部省 1972（昭和47）年

「兵庫県教育史」

兵庫県教育委員会 1963（昭和38）年

「兵庫県教育委員会40年の歩み」

兵庫県教育委員会 1988（昭和63）年

「新修芦屋市史」

芦屋市役所 1971（昭和46）年

「芦高十五年史」

1955（昭和30）年

「芦高二十年史」

1962（昭和37）年

「芦高二十五年史」

1965（昭和40）年

「芦高三十年史」

1971（昭和46）年

「芦高四十年史」

1982（昭和57）年

「学校要覧」

「進学指導資料」

「生徒手帳」

「県芦屋育友会報」「県芦屋PTA会報」

「隠谷聲」（記念講演集）

「あしたづ」（生徒作品集）

「芦笛」（自治会機関誌）

「芦高新聞」（自治会出版部）

「あ志か比」（同窓会機関誌）

野外活動しおり・文集

卒業アルバム

記念祭パンフレット

職員会議資料・校内配布物

その他